

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第224集

丸山遺跡

長野県佐久市下小田切丸山遺跡発掘調査報告書

2014

佐久市教育委員会

例 言

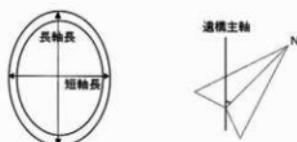
- 1 本書は佐久広域連合による消防署庁舎建設工事に伴う丸山遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 事業主体者 佐久広域連合
- 3 調査主体者 佐久市教育委員会
- 4 遺跡名及び所在地 丸山遺跡 (UMY)
佐久市下小田切
- 5 調査担当者 久保 浩一郎
- 6 本書の編集・執筆は久保が行った。
- 7 本書及び出土遺物は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

凡 例

- 1 遺構の略称は以下のとおりである。

M—溝址 D—土坑

- 2 遺構断面図の標高は可能な限り遺構ごとに統一し、スケールバー上に値を示した。
- 3 遺構の計測値は以下の値である。



- 4 スクリーントーンの表示は以下のとおりである。なお本書で用いる地山とは、遺構の基盤層を表すものである。

地山

赤色塗彩

- 5 遺物の実測図番号と写真番号は対応する。実測図は縮尺1/4、写真是1/2と1/3で掲載した。
- 6 本書で示した方位は真北であり、座標値は世界測地系に準拠している。
- 7 遺物観察表における()は推定値を、()は残存値を示す。

目 次

第Ⅰ章 発掘調査の経過	1	第Ⅲ章 遺構と遺物	6
第1節 発掘調査の経緯	1	第IV章 総括	11
第2節 調査組織	1		
第3節 調査日誌	1		
第4節 遺構・遺物の概要	1		
第Ⅱ章 遺跡の位置と環境	3		
第1節 地理的環境	3		
第2節 歴史的環境	4		
第3節 基本層序	4		

第Ⅰ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査の経緯

丸山遺跡は、佐久市下小田切に所在する縄文時代から平安時代までの複合遺跡である。東の千曲川と西の片貝川に挟まれた勝間原台地上に立地し、標高725m内外を測る。

今回、遺跡内において佐久広域連合による消防署庁舎建設工事が計画された。対象地西側では平成元年度に発掘調査が実施され弥生時代の竪穴住居址等が検出されているため、対象地内にも遺構の広がりが想定された。よって対象地3,292m²について遺構の確認を目的とした試掘調査を平成24年11月8日～9日に実施した。14本のトレーンチを設定し調査した結果、溝等が検出された（第1図）。保護協議の結果、遺跡の保存が不可能な建物部分について記録保存を目的とする発掘調査を行うこととなった。発掘調査は、まず重機により表土を除去し、調査区内に国土地理院の平面直角座標系原点第Ⅷ系を基点とする4mグリッドを設置した（第2図）。グリッドは東西方向にアルファベット名を、南北方向にローマ数字名を付け、それらを合わせてグリッド名とした。グリッド設定後は遺構確認面の精査・遺構検出を行い、各遺構に対して掘削・セクション写真撮影・セクション図作成・完掘・完掘写真撮影・平面図作成の作業を行った。遺構掘削終了後、調査区全景写真撮影・調査区内測量作業を行った。

第2節 調査組織

調査受託者	佐久市教育委員会	教育長 土屋 盛夫
事務局	社会教育部長	矢野 光宏
	文化財課長	三石 宗一
	文化財調査係長	比田井 清美
	文化財調査係	須藤隆司 小林 真寿 富沢 一明 上原 学 神津 一明 久保 浩一郎
嘱託職員	林 幸彦	
調査主任	森泉 かよ子	
調査担当者	久保 浩一郎	
調査員	赤羽根 篤 浅沼 勝男 岩松 茂年 木内 修一 神津 千春 坂井 一夫 堀籠 保子	

第3節 調査日誌

平成25年6月11日	バックホウにより表土掘削を開始する。
6月13日	調査区内にグリッド杭打設。遺構確認面精査、遺構掘削開始。
6月14日	調査区北東部の黒色土堆積掘下げ開始。
6月24日	掘削作業終了。調査区全景写真撮影。
6月25日	調査区内の測量作業を行い、記録作成作業終了。
6月28日	機材を撤収し、すべての現場作業を終了する。
7月1日～	遺物洗浄・注記・接合・実測・図面整理・報告書執筆作業を順次行う。
平成26年3月	報告書を刊行しすべての作業を終了する。

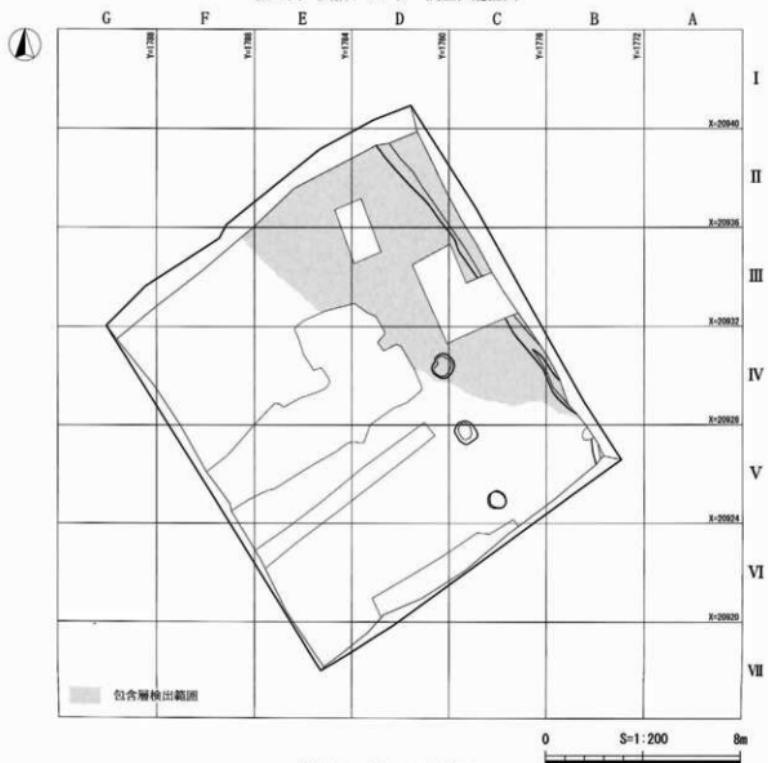
第4節 遺構・遺物の概要

遺構 溝址 1条（弥生時代後期）、土坑3基

遺物 弥生土器（壺・甕・高杯・鉢・瓶）、須恵器、土師器、石器（打製石斧・敲石・削器・剥片）



第1図 試掘トレンチ・調査区配置図



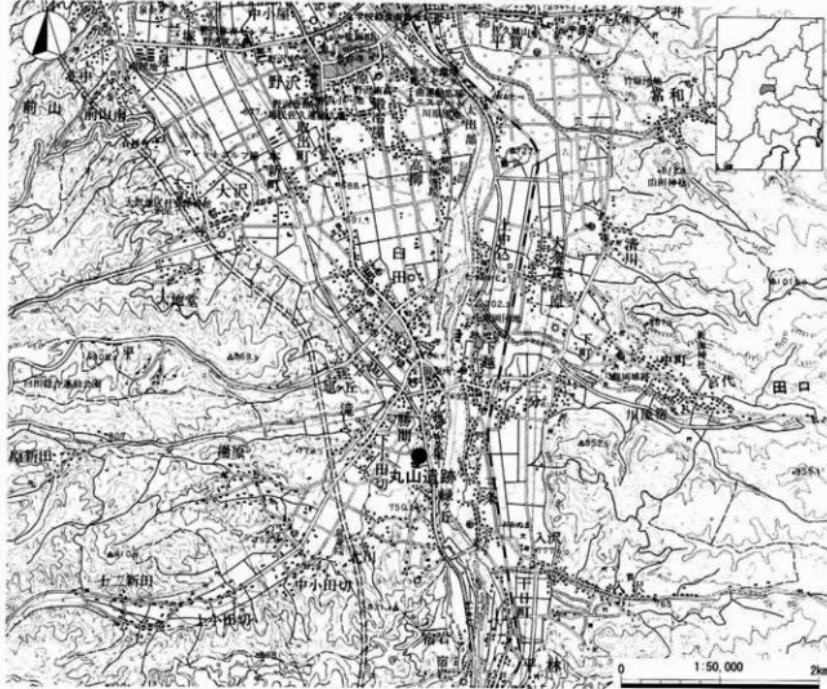
第2図 グリッド設定図

第Ⅱ章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

佐久市は長野県中央東端に位置する。東に荒船山・物見山・寄石山・八風山などを主峰とする佐久山地、北に浅間山、南に蓼科山・八ヶ岳を望み、その中央には周囲の山々から流れる支流を集めながら千曲川が北流する。佐久市の地質を概観すると、千曲川両岸で様相が異なる。右岸（北側）は浅間山の火山噴出物により形成された台地であり、塚原泥流や第一軽石流・第二軽石流と呼ばれる堆積物に覆われている。佐久市北部は主に第一軽石流が厚く堆積しているが、この堆積物が河川の浸食をうけて形成された浸食谷、いわゆる「田切り地形」が特徴的に発達している。一方左岸（南側）は蓼科・八ヶ岳から緩やかに伸びる山裾と、そこを流れる小河川により形成された小規模な扇状地及び千曲川の沖積低地が広がっている。

丸山遺跡は佐久平南端の千曲川左岸、八ヶ岳山麓末端の勝間原台地上に立地している。南北に延びる当台地は千曲川まで至り、先端部は30~40mの浸蝕崖となる。遺跡東側は北流する千曲川の浸蝕により比高差15m程度の崖となる。西側には片貝川が形成した扇状地が広がり、遺跡はこの扇状地に向かう緩斜面上に展開している。今回発掘調査を実施したのは、遺跡の中央東端（第3・4図）である。すでに削平されてはいるが、西に向かう緩斜面の頂上付近に位置する。



第3図 丸山遺跡位置図

第2節 歴史的環境

丸山遺跡周辺には、縄文時代から奈良・平安時代の集落跡や中世の城跡などが数多く分布している（第5図・第1表）。縄文時代の遺跡は本遺跡を含めた勝間原台地及び千曲川両岸の段丘上に広く分布している。井上遺跡では草創期の所産と考えられる御子柴型磨製石斧が、上滝遺跡では早期の押型文系土器が採集されており、早い段階から生活の舞台となっていたと考えられる。小山崎遺跡群反田遺跡では前期前半と中期後半の住居址が確認されている。

弥生時代では、小山崎遺跡群反田遺跡で弥生時代中期前半に位置付けられる土器が出土しており、当該期遺跡の希薄な佐久市において重要な発見がなされている。中期後半になると、佐久平中央の湯川沿岸で集落が形成されるようになる。本遺跡周辺では、本遺跡や井上遺跡などで栗林式土器がわずかに認められるが、生活痕跡は希薄である。後期に至り、勝間原台地と千曲川東岸の低位段丘上で遺跡が増加する。これらの遺跡は、当時としては稲作が可能な限界標高に近い地点であり、本遺跡以南では集落跡が希薄となる。勝間原台地上では勝間原遺跡と本調査区西側において発掘調査がなされており（第1図）、弥生時代後期の住居址が検出されている。

古墳時代では、前期の遺跡は少ない。中期以降に遺跡数が増加し、台地上から低地部まで広く遺跡が展開するようになる。井上遺跡では中期・後期の住居址が確認されている。周囲の尾根上には古墳も築かれるが、ほとんどは後期以降のものと考えられる。また本遺跡周辺が佐久平における古墳分布のほぼ南限にあたる。奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代と同様の場所に営まれることが多く、周辺に広く展開する。本遺跡においても平成元年度調査で奈良時代の堅穴住居址・掘立柱建物址・土坑などが検出されている。中世では勝間原台地先端の稻荷山城跡をはじめ、周囲の尾根上に多くの山城が築かれる。

第3節 基本層序

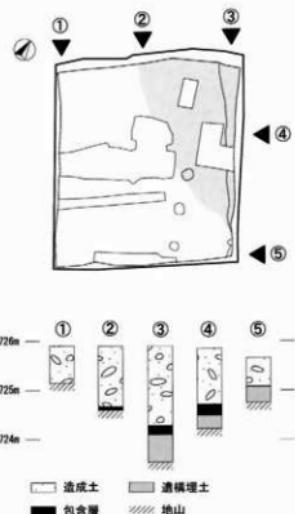
本調査区の基本層序は以下の3層に大別される。遺構は地山上面で確認できる。

造成土 暗褐色を呈し碎石を含む。

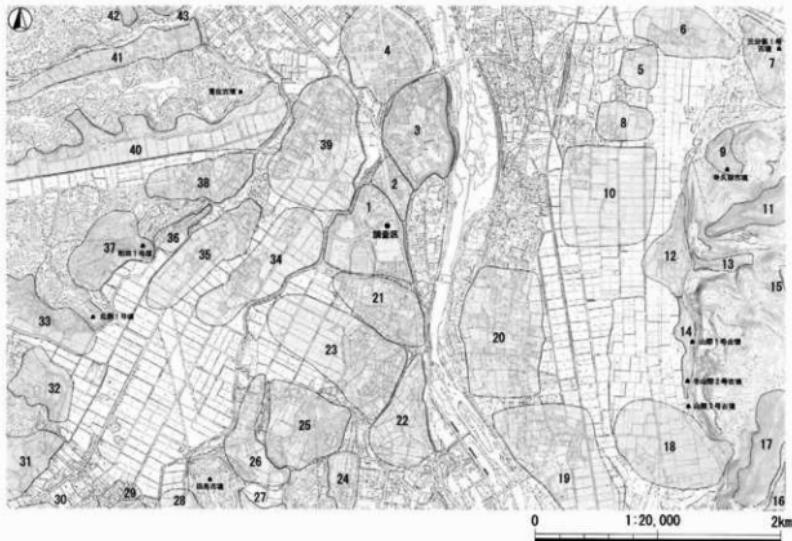
包含層 調査区北側で確認される。黒褐色を呈し弥生時代後期の遺物を主体的に含む。

地山 調査区北側ではにぶい黄橙色～明黄褐色を呈する粘質土で、厚さは約60cmである。下位は灰白色を呈する粘土である。調査区北側では造成上下位がこの灰白色粘質土となり、60cm程度は削平されているものと考えられる。

調査区内では南から北に向って傾斜する地形が確認できた。平成元年度調査区では標高718～720m程度で遺構が確認されており、調査区東側では黄橙色～明黄褐色粘質土に対応すると考えられる層で、西側では灰白色粘質土に対応すると考えられる層で、遺構が確認されている。



第4図 基本層序模式図
(平面図1:400、セクション図1:100)



第5図 周辺遺跡分布図

番号	遺跡名	绳文	弥生	古墳	奈良 平安	中世	近世	番号	遺跡名	绳文	弥生	古墳	奈良 平安	中世	近世
1	丸山遺跡	○	○	○	○			23	栗ノ木遺跡	○	○	○	○		
2	城山遺跡	○		○	○			24	千葉台御地遺跡			○	○		
3	福荷山城跡					○		25	田島遺跡				○		
4	城下遺跡	○						26	広沢遺跡	○	○	○	○		
5	田中遺跡	○	○	○	○			27	田高久保遺跡	○			○		
6	西塚田遺跡		○	○	○			28	城影遺跡	○		○	○		
7	三分遺跡群	○		○	○		○	29	権峰城跡				○		
8	戸井口遺跡	○		○	○			30	札幌吉原遺跡	○		○	○		
9	蓮照寺遺跡	○	○				○	31	向城遺跡	○		○	○		
10	井上遺跡	○	○	○	○			32	中島遺跡			○	○		
11	岩崎皆城跡					○		33	北島遺跡	○		○	○		
12	荒巻遺跡		○	○	○	○		34	日影遺跡			○	○		
13	小山沢遺跡	○						35	東淮遺跡	○		○	○		
14	山際遺跡		○	○	○	○		36	浅見跡			○	○		
15	いわな寺					○		37	和田遺跡	○		○	○		
16	櫛原通遺跡	○		○	○			38	下高遺跡			○	○	○	
17	磯部城跡					○		39	小山崎遺跡群	○	○	○	○	○	
18	和田前遺跡			○	○			40	上瀬・中瀬・ 下瀬遺跡	○		○	○		
19	南裏遺跡				○			41	台ヶ坂遺跡	○		○	○		
20	祇園田遺跡				○	○		42	守久保遺跡	○		○	○		
21	勝間原遺跡	○	○	○	○			43	源氏原城跡					○	
22	北川勝門遺跡		○	○	○										

第1表 周辺遺跡一覧表

第三章 遺構と遺物

M1号溝址 調査区東端のBVからDIIグリッドに位置する。東・南・北側が調査区外に延びるため全容は不明であるが、南東から北西に向かう谷状地形に沿って延びていると考えられる。検出部分では長さ15.3m、最大幅1.66m、最大深度0.9mを測る。主軸はN-35°-Wである。断面は逆台形状で、黒褐色粘質土および黄褐色粘質土の埋土が認められた。

遺物は弥生土器と石器が出土した。1は弥生土器の甕の口縁部片である。口唇部に刻み目が、口縁部には櫛描波状文が施される。内面はナデ・ミガキが施される。2は弥生土器の甕の底部と考えられる。3は敲石である。断面三角形の礫の頂点と長軸の両端部を使用している。出土した遺物のほとんどが碎片であり、磨滅が顕著であったため図化できた遺物は少量であるが、他にもヘラ描矢羽根文が施された甕、櫛描斜走文が施された甕、赤色塗彩が施された鉢などが出土している。

D1号土坑 調査区東側、CVグリッドに位置する。平面は隅丸方形を呈し、長軸0.98m、短軸0.80m、深さ0.32m、主軸N-34°C-Wを測る。埋土は灰黄褐色を呈する粘質土で、橙色粘土ブロックを少量含む。

遺物は弥生土器と石器が出土した。1は弥生土器の甕の口縁部片である。緩やかに外反する口縁部には櫛描波状文が施される。2は弥生土器の鉢である。内外面赤色塗彩が施されていたと考えられるが、ほとんどが剥落している。3は繩物石と考えられる。

D2号土坑 調査区東側、CVグリッドに位置する。平面は円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.73m、深さ0.08m、主軸N-40°C-Wを測る。埋土はD1号土坑同様の灰黄褐色を呈する粘質土で、橙色粘土ブロックを少量含む。

遺物は弥生土器と考えられる破片が数点出土したが、磨滅が著しく図化できなかった。

D3号土坑 調査区東側、DIVグリッドに位置する。平面は不整円形を呈し、長軸1.01m、短軸0.95m、深さ0.16m、主軸N-11°C-Wを測る。埋土は灰黄褐色を呈する粘質土で、灰白色粘土ブロックや炭化物を少量含む。

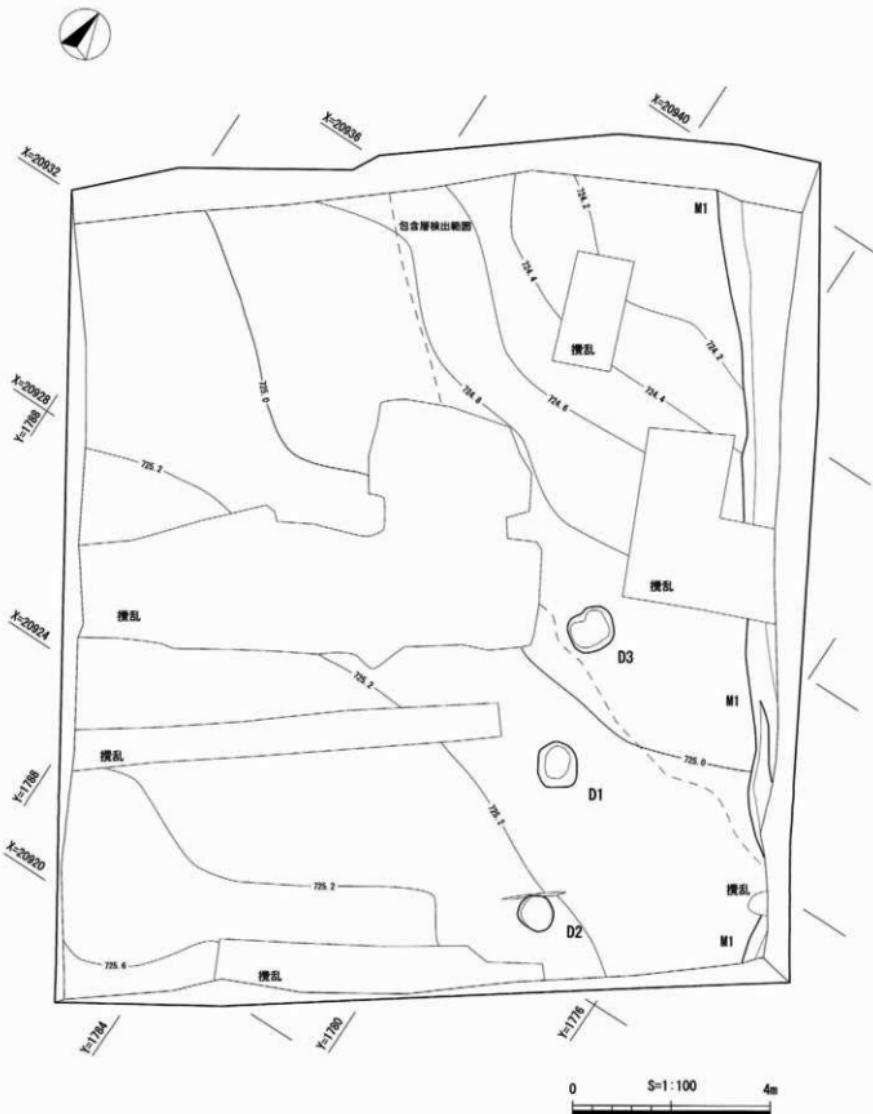
遺物は弥生土器が出土した。1は弥生土器の鉢である。内外面ミガキで赤色塗彩が施される。2は甕ないし壺の底部と考えられる。

包含層出土遺物 包含層は調査区北側のBIV、CII～IV、DII～IV、EII・III、FIIIグリッドで認められた。谷状の傾斜面に堆積した層で、本来はより広範囲に存在したと考えられるが、南側は削平されたと考えられる。包含層は褐灰色粘質土で、一部にぶい橙色や灰褐色に変色した部分も認められる（第8図M1号溝址セクション2～4層）。包含層からは繩文土器の深鉢、弥生土器の壺・甕・高杯・鉢・甑、須恵器の杯、土師器の甑・坏、打製石斧、黒曜石の剥片、チャート製の削器が出土している。

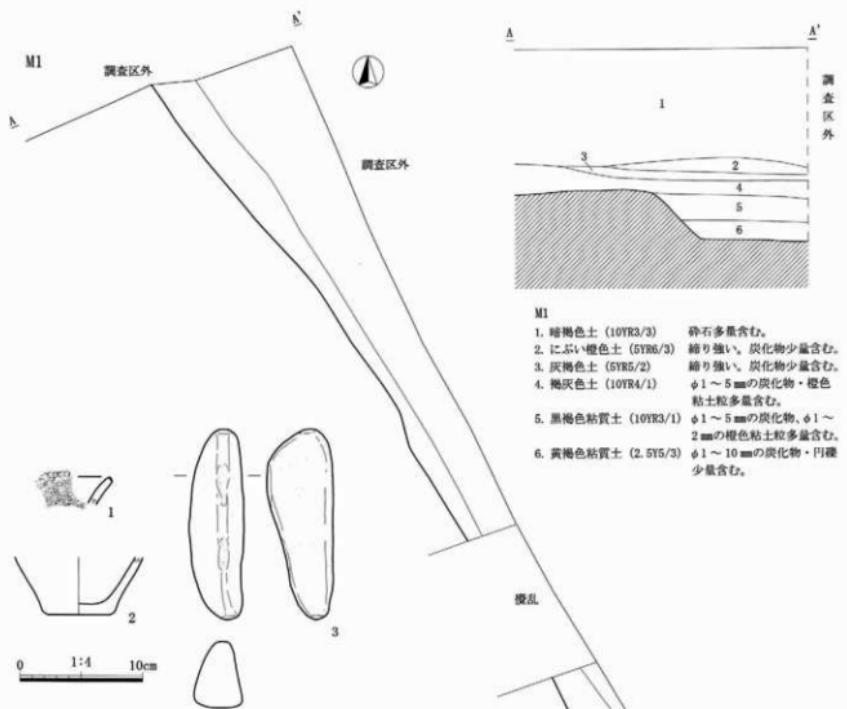
1・2は繩文土器の深鉢である。1は口縁下部に隆帯がある。隆帯上には本来圧痕があったと考えられるが、磨滅してしまっている。2は波状口縁の端部に8の字状隆帯が付く。いずれも後期の所産と考えられる。

3～9は弥生土器の甕である。3は受口状口縁で、口縁部に櫛描波状文が施され、内外面赤色塗彩される。4は直線的に外傾する口縁部に櫛描斜走文が施される。5・6は無彩で、5は受口状、6は外傾外反する。7・8は頸部で、7はヘラ描矢羽根文が施され、8は櫛描T字文が施される。いずれも磨滅により赤色塗彩の有無は不明である。9は体部下半で明瞭な稜線が認められる。

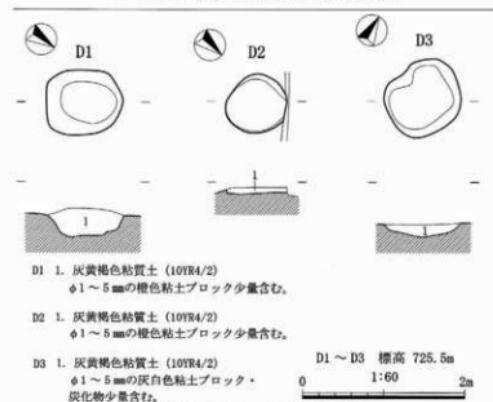
10～17は弥生土器の甕である。10は外傾外反する口縁部に櫛描斜走文が施される。12は横羽状の櫛描斜走文が施される。13は折返し口縁で櫛描斜走文が施される。14は口縁部から体部に櫛描斜走文が、頸部に櫛描簾状文が施される。15・16は強く外反する口縁部に櫛描波状文が施される。17は外傾外反する口縁部であるが、磨滅により調整・文様は不明である。



第6図 調査区全体図



第7図 M1号溝址遺構・遺物実測図



第8図 D1～3号土坑実測図



D1 号土坑出土遺物



1

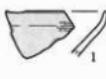


2

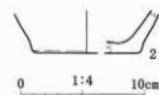


3

D3 号土坑出土遺物



1



2

0 1:4 10cm

第9図 遺構出土遺物実測図

包含層出土遺物



1



3 5



4



6



7



8



9



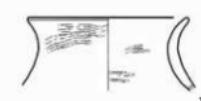
10



11 12



13



15



16 17



18



19



20 21



22



23



24 25 26



27



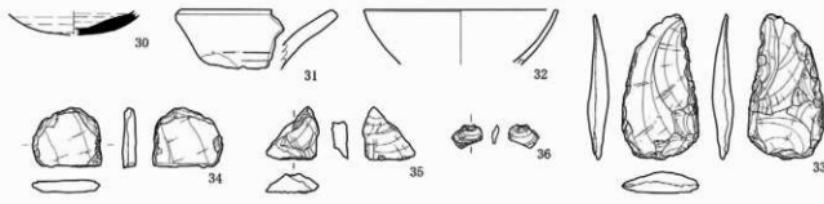
28



29 30

0 1:4 10cm

第10図 包含層出土遺物実測図 1



第11図 包含層出土遺物実測図2

0 1:4 10cm

18~21は弥生土器の壺ないし甕の底部と考えられる。いずれも磨滅により調整等不明瞭であるが、18は外面にミガキが施される。21は内面に粘土紐積上痕が残る。

22・23は弥生土器の高坏である。22は図上復元したものであるが、口縁部で内面に稜をもって外折し、端部に突起を有する。23は無彩の脚部である。

24~27は弥生土器の鉢である。24は口縁部片で、内外面赤色塗彩が施される。25は磨滅により調整等不明である。27は底部外面にもミガキが施される。

28・29は弥生土器の甑である。いずれも単孔である。

30は須恵器の杯である。丸底でヘラケズリが施される。31は土師器の甑と考えられる。30・31は古墳時代の所産と考えられる。32は土師器の杯と考えられ、砂粒の少ない緻密な胎土である。奈良・平安時代の所産と考えられる。

33・34は打製石斧である。33は貝殻状剥片の端部に刃部を作出する。やや湾曲した非対称形ではあるが、厚さはほぼ均一である。34は基部破片である。薄い板状の剥片を素材としている。35は黒曜石の剥片である。36はチャートの削器である。三角形の剥片の一辺を二次加工し刃部を作出している。

番号	遺構 グリッド	種類	器種	法量(cm)			調整・文様		備考
				口径	底径	器高	内面	外面	
1	M1	弥生土器	甕	—	—	(2.3)	ナデ	口唇部刻み・櫛描波状文・ 櫛描横線文	
2	M1	弥生土器	—		5.8	(4.7)	ナデ	ミガキ	壺ないし甕
1	D1	弥生土器	甕	—	—	(4.1)	ナデ	櫛描波状文	
2	D1	弥生土器	鉢	(14.8)	—	(5.7)	—	—	表面磨滅調整不明
1	D3	弥生土器	鉢	—	—	(3.7)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
2	D3	弥生土器	—	—	(8.7)	(3.5)	指圧痕	—	表面磨滅調整不明
1	DIII	縄文土器	深鉢	—	—	(5.3)	—	口縁下圧痕隆帯	後期
2	EII	縄文土器	深鉢	—	—	(2.6)	—	口縁部8字状隆帯	後期
3	EII	弥生土器	甕	(27.6)	—	(4.0)	ミガキ・赤彩	櫛描波状文・ミガキ・赤彩	
4	EII	弥生土器	甕	(20.6)	—	(6.3)	ミガキ	ハケ	
5	CIII	弥生土器	甕	—	—	(2.6)	ナデ	ナデ	
6	CIII	弥生土器	甕	—	—	(7.0)	—	—	表面磨滅調整不明
7	EIII	弥生土器	甕	—	—	(6.7)	—	ヘラ描矢羽根状文	
8	DII	弥生土器	甕	—	—	(5.5)	—	櫛描T字文	
9	DII	弥生土器	甕	—	—	(7.3)	—	ミガキ	
10	CV	弥生土器	甕	(21.4)	—	(9.5)	ミガキ	櫛描斜走文・櫛描横線文	
11	DIII	弥生土器	甕	—	—	(2.3)	—	櫛描斜走文	
12	EII	弥生土器	甕	—	—	(3.0)	ミガキ	櫛描斜走文	
13	DII	弥生土器	甕	(26.6)	—	(5.3)	—	櫛描斜走文	
14	EII	弥生土器	甕	—	—	(7.7)	—	櫛描斜走文・櫛描縦状文	
15	CV	弥生土器	甕	(13.0)	—	(5.5)	ミガキ	櫛描波状文	

第2表 遺物観察表1

番号	遺構 グリッド	種類	器種	法量(cm)			調整・文様		備考
				口径	底径	器高	内面	外面	
16	DIV	弥生土器	壺	—	—	(4.8)	—	櫛描波状文	
17	CV	弥生土器	壺	(15.7)	—	(8.3)	—	—	磨滅により調整不明
18	E II	弥生土器	—	—	6.4	(3.6)	ミガキ	ナデ・ミガキ	壺ないし壺
19	E II	弥生土器	—	—	6.4	(4.7)	ナデ・ハケ	—	壺ないし壺
20	E II	弥生土器	—	—	7.7	(3.0)	ナデ	ナデ	壺ないし壺
21	D III	弥生土器	—	—	(2.8)	—	粘土帶積上痕	—	
22	C IV	弥生土器	高杯	(33.8)	—	(8.8)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	図上復元
23	D II	弥生土器	高杯	—	(15.4)	(12.7)	ナデ	ミガキ	
24	E II	弥生土器	鉢	(19.7)	—	(3.8)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
25	E III	弥生土器	鉢	(23.2)	—	(6.5)	—	—	磨滅により調整不明
26	D III	弥生土器	鉢	—	3.8	(4.3)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
27	CV	弥生土器	鉢	—	4.0	(1.7)	ミガキ・赤彩	ミガキ・赤彩	
28	D II	弥生土器	壺	—	4.8	(4.7)	—	ミガキ	
29	D II	弥生土器	壺	—	(4.9)	(4.9)	—	—	磨滅により調整不明
30	D II	須恵器	壺	—	(5.6)	(2.0)	ロクロナデ	ロクロナデ	
31	D II	土師器	—	—	(4.9)	ナデ	—	—	壺か
32	D III・E III	土師器	壺	(15.8)	—	(4.5)	—	—	磨滅により調整不明
番号	遺構 グリッド	器種	法量(cm・g)			石材	備考		
			長さ	幅	厚さ		重量	—	—
3	M1	戴石	15.6	4.5	5.5	489	安山岩		
3	D1	縊物石か	6.7	3.8	2.3	81	安山岩		
33	E II	打製石斧	11.9	6.3	1.7	107	黒色質岩		
34	D III	打製石斧	(4.9)	(5.7)	(1.1)	(45)	溶結凝灰岩	基部破片	
35	D III	削器	4.3	4.2	1.6	19	チャート		
36	E II	剥片	0.9	2.5	0.6	2	黒曜石		

第3表 遺物観察表2

第IV章 総括

今回の発掘調査では、溝1条と土坑3基、遺物包含層が確認された。ここで遺構及び遺物包含層の形成時期や跡跡の様相について検討し、まとめとしたい。

M1号溝からは、弥生土器・石器が出土している。土器については磨滅が著しく図化し得た遺物は少ないが、壺・甕・高杯・鉢が確認できた。壺では頸部にヘラ描矢羽根文・櫛描縦状文・櫛描T字文Cが、甕では口縁部から体部に櫛描波状文と櫛描斜走文が認められる。図示した3のみ口唇部に刻み目を有する。これら出土遺物の特徴から、M1号溝は弥生時代後期の所産と考えられる。

D1～D3号土坑については出土遺物が少量ではあるが、弥生時代後期と考えられる土器に限られたことから、弥生時代後期の所産であると考えられる。

遺物包含層からは弥生土器・縊文土器・古墳時代の須恵器・土師器・奈良時代の土師器・石器など多様な遺物が出土している。最も多い弥生土器をみてみると、器種は壺・甕・高杯・鉢・壺が確認できる。壺は第10図3を除いて文様が頸部に限られ、ヘラ描矢羽根文・櫛描縦状文・櫛描T字文C・櫛描縦状文が認められる。また9のように体部下半で外縁をもって屈曲する器形が主体となるようである。甕は口縁部が弓状に外反する形態に限られ、口縁部から体部に櫛描波状文・櫛描斜走文が、頸部に櫛描縦状文が認められる。斜走文は確認し得る範囲では横羽状に限られる。これらの特徴から、包含層出土の弥生土器は後期に比定され、周囲に当該期集落が展開していたと考えられる。弥生時代後期以降、谷状地形が埋没する過程で堆積していったものであろう。

以上、出土遺物から本調査区の遺構は弥生時代後期の範疇で捉えられると考えられる。本調査区西側に位置する平成元年度調査区（以下1次調査区と呼称）でも、後期の住居址等が検出されている。これらをあわせて、丸山遺跡における弥生時代後期集落の様相を考えてみたい（第12図）。本調査とそ



れに先立つ試掘調査によって把握できた地山の標高、また過去の調査と地形図から地形を推測した。

その結果、東西二つの平坦部が想定でき、本調査区と1次調査区間には比高差4~5m程度の斜面が存在していたと考えられる。現在でも東西で3.5m程度の高低差が認められるが、当時の高低差を反映したものといえる。

本調査区が位置する東側平坦部は標高725~726m程度で、勝間原遺跡が所在する南側から続く台地頂上部の端にあたると考えられ、北側には谷状地形が存在したと考えられる。試掘調査では、削平を受けた弥生時代後期と考えられる住居址が認められ、数棟の住居址が存在していた可能性がある。

1次調査区を含む西側平坦部は718~720m程度で台地西側斜面中位に位置し、テラス状に南東から北西方向に延びると考えられる。耕作等による削平を受けており、本来はさらに高かったと考えられるが、試掘調査で確認された地山の落ち込みから、本調査区との段差は存在したと考えられる。1次調査では標高720m付近で弥生時代後期後半古相に位置付けられる住居址が4棟、その西側で同時期の土坑墓と考えられる土坑6基が検出されている。

これら2地点が同時に展開した同一集落か、時間差を有する別の集落か、現在得られている資料から判断するのは困難であるが、仮に同時に展開していたならば、東西の高低差をどのように解釈すべきか。台地上に集落が形成される過程で、地形的制約から高低差が生じてしまったのか、あるいは意図的に配置されたものかが問題となる。弥生時代後期に、同じように丘陵上に占地する後沢遺跡や後家山遺跡では、同一平坦面、同一斜面上に集落が展開しており、集落内で段を有するような高低差は認められない。現状では集落の実態まで言及し得ないが、弥生時代後期の佐久地域における主要生産域の一つであった片貝川流域、そのほぼ南限に位置する本遺跡のもつ意味は大きい。集落の実態を把握するために、調査事例および資料の増加が望まれる。

参考文献

- | | |
|------------------------------------|------------------------------|
| 白田町教育委員会 1987『勝間原遺跡』 | 白田町教育委員会 1991『丸山遺跡』 |
| 佐久考古学会 1990『赤い土器を追う』 | 白田町誌編纂委員会 2007『白田町誌』 |
| 佐久市教育委員会 2008『小山崎遺跡群 反田遺跡』 | 長野県考古学会弥生部会 1999『長野県の弥生土器編年』 |
| 佐久市教育委員会 2004『後家山遺跡 東久保遺跡 宮田遺跡Ⅰ・Ⅲ』 | |



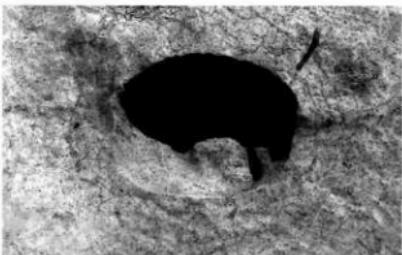
調査区全景（南東から）



調査区全景（南から）



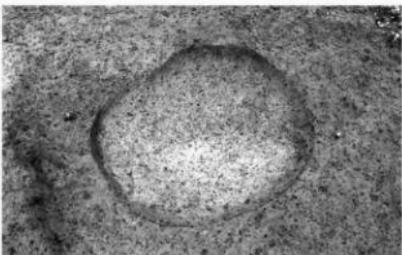
包含層遺物出土状況（西から）



D1号土坑完掘状況（東から）



D2号土坑完掘状況（東から）



D3号土坑完掘状況（南から）



M1号溝跡セクション（南から）



M1号溝跡完掘状況（西南から）



M1号溝跡完掘状況（西から）

M1 号溝址出土遺物



1



2



3

D1 号土坑
出土遺物

1

2

3

D3 号土坑
出土遺物

1



2

包含層出土遺物



1



2



3

4



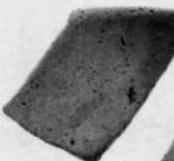
5



7



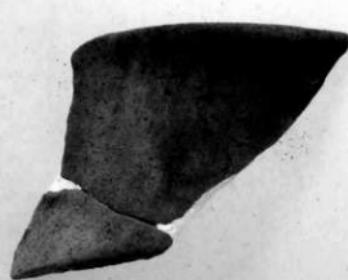
8



6



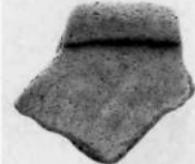
9



10

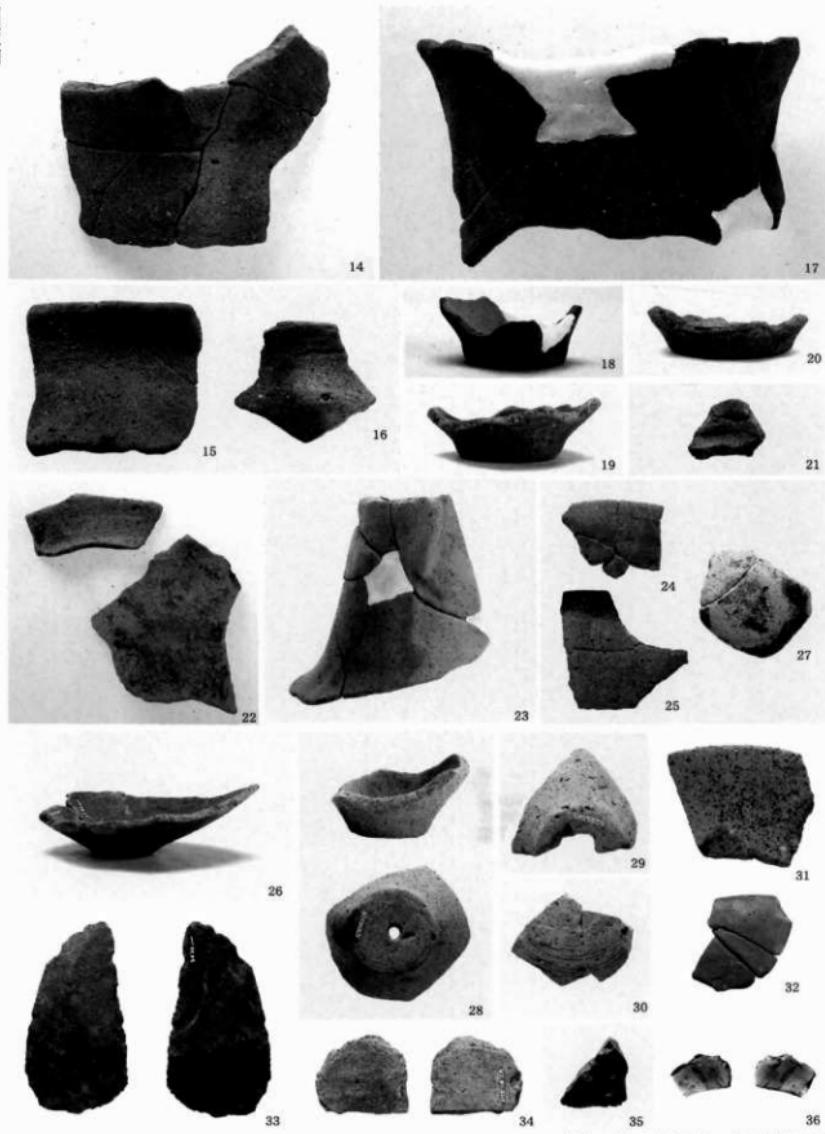


12



13

(M1 の 1、包含層の 1 ~ 5・7・8・10 ~ 13 は 1/2、その他は 1/3)



(14～17・36は1/2、その他は1/3)

報告書抄録

ふりがな	まるやまいせき							
書名	丸山遺跡							
シリーズ名	佐久市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第224集							
編著者名	久保 浩一郎							
編集機関	佐久市教育委員会 文化財課							
所在地	長野県佐久市志賀 5953 Tel:0267-68-7321 Fax:0267-68-7323							
発行年月日	平成26年(2014) 3月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ一ド 市町村	北緯	東經	調査期間	調査面積 (m ²)	調査因	
まるやまいせき 丸山遺跡	さくしもしもたぎり 佐久市下小田切 546-1 547	20217	610	36° 11' 19"	138° 28' 49"	20130610 ~ 20130628	260	消防 庁舎 建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
丸山遺跡	散布地	弥生時代	溝土 址 1条 坑 3基	弥生土器、石器 (打製石斧・削器・ 敲石)、須恵器、 土師器				
要約	佐久平南端に位置する勝間原台地上で、弥生時代後期と考えられる溝址と土坑が検出された。また谷状地形に堆積した包含層から弥生土器、石器等が出土した。							

佐久市埋蔵文化財調査報告書 第224集

丸山遺跡

平成26年(2014) 3月

編集・発行 佐久市教育委員会

〒385-8501 長野県佐久市中込 3056

文化財課

〒385-0006 長野県佐久市志賀 5953

Tel:0267-68-7321

印刷所

キクハラリンク有限会社

